



ひょうごの赤十字

海外たすけあい義援金へのご協力ありがとうございました。

皆さまからお寄せいただきました海外たすけあい義援金は、10,161,995円となりました。皆様のご協力に心から感謝申し上げます。

1月に青少年赤十字提供プログラムに取り組んでいただいた学校

神戸市立竜が台中学校、神戸市立福住小学校、神戸市立長峰中学校、宝塚市立長尾小学校、佐用町立三河小学校、三田市立武庫小学校、西宮市立苦楽園中学校、神戸市立鈴蘭台中学校、神戸市立大池中学校、加古川市立平岡小学校、淡路市立一宮中学校、西宮市立大社中学校、三田市立けやき台中学校、(実施日順)

Seminar/Guidance



ひょうご安全の日推進事業

～「災害対応力を身につけよう!!」を開催します～

平成23年2月11日(金・祝)10時～14時、伊丹市立伊丹小学校(伊丹市)において、「災害対応力を身につけよう!!」防災イベントを開催します。

今回で4回目を迎えるこの事業では、「ひょうご安全の日」の趣旨(阪神・淡路大震災の経験と教訓の継承)を踏まえ、防災、減災に寄与するとともに赤十字防災ボランティア活動の充実と後継者の育成を図ることを目的に、地域赤十字奉仕団、赤十字防災ボランティアの皆さんと赤十字職員による総合防災訓練(10時～12時)を実施します。

また、午後からは非常食や配布期限の迫った救援物資の無料配布(数量限定)やいつ起こるか判らない災害に備えて、災害が起こったときに役立つ知識や技術を来場された県民のみなさんに楽しく身につけていただくためのイベントを行いますのでたくさんの方々のご来場をお待ちしています。



昨年の「災害対応力を身につけよう!!」での炊出し訓練



応援いただいている皆さまに感謝

～新長田鉄人前献血ルーム誕生から1周年～

阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた新長田の街。その街に新長田鉄人前献血ルームが誕生して1周年を迎えたことから1月23日(日)、1周年記念感謝イベントを開催しました。

イベントには、いつも日本赤十字社の活動を応援いただいている地元プロサッカーチーム「ヴィッセル神戸」から…なんと! GK紀氏隆秀選手とMF森岡亮太選手が1日献血ルーム所長として、そしてモーヴィやヴィッセルガールの皆さんも応援に駆けつけてくださいました。

そこで、日頃、献血推進運動でお世話になっている新長田界隈の商店街の皆さんをはじめ長田区地区赤十字奉仕団、神戸長田ライオンズクラブ等の皆さん、そしてヴィッセル神戸の皆さんで商店街をパレード。また、神戸市立室内小学校の児童の皆さんによる金管バンドも参加し、市民の皆さんに献血のご協力を呼びかけました。

一方、献血ルームでは、サイン入り公式試合球、紀氏選手のサイン入りキーパーグローブ、森岡選手のサイン入りトレーニングシューズ、大久保選手のサイン色紙など貴重なグッズをヴィッセル神戸から寄贈いただき展示、献血者の皆さんにご覧いただくなど盛りだくさんの内容の感謝イベントとなりました。

神戸市西部地域の献血拠点として誕生した新長田鉄人前献血ルームですが、その役割はまだ十分に果たせていません。ぜひ、新長田鉄人前献血ルームの「献血サポーター」になっていただけませんか?



地域の皆さんと商店街をパレード

日本赤十字社 兵庫県支部
Japanese Red Cross Society
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-4-5
tel. 078-241-9889 fax.078-241-6990
URL http://www.hyogo.jrc.or.jp/

Contents

特集

阪神・淡路大震災から16年

- 国際赤十字・赤新月社連盟幹部が兵庫県支部を訪問

Close-up 赤十字

- 地域医療を守るため
- 久保副支部長に国際活動報告

Seminar/Guidance

- 海外たすけあい義援金へのご協力ありがとうございました
- 青少年赤十字提供プログラムに取り組んでいただいた学校
- ひょうご安全の日推進事業
- 応援いただいている皆さまに感謝





阪神・淡路大震災から16年

～1.17は忘れない～

阪神・淡路大震災から16年を迎える平成23年1月17日（月）、風化しがちな防災意識を新たにするとともに、震災の経験と教訓を発信し、1.17を忘れず語り継ぐため、「1.17ひょうごメモリアルウォーク2011」が兵庫県主催で実施されました。

当日は、あの大地震が発生した日と同じ厳しい寒さの中、ウォーク参加者は、あらかじめウォーキングコースとして設定された6つのコースからゴール地点のHAT神戸内の「なぎさ公園」（神戸市中央区）を目指しました。メモリアルウォークの休憩所でもある兵庫県支部では、1階駐車場において、参加者の皆さんへみそ汁の炊き出しを行うとともに、赤十字の災害救援活動、国際活動などのパネル展示も行い、多くの皆さまに赤十字活動を知っていただく機会となりました。

一方、ゴール地点のなぎさ公園内では、dERU[®]用テントを展開し「AED体験コーナー」「健康相談コーナー」を設け、一般参加者による体験型講習や健康相談を実施しました。dERU[®]用テント内では昨年に続きゲーム方式で中学生や看護師を志す学生、さらには一般参加者が、傷病者を担架によりdERU[®]テントへ搬送する訓練や、心肺蘇生、AEDによる救命措置などの訓練も行われました。

参加者は一様に、決して忘れられないあの日の想いを胸に刻み、会場をあとにされていました。

※dERU Domestic Emergency Response Unitの略で国内型緊急仮設診療所を意味します。



国際赤十字・赤新月社連盟幹部が兵庫県支部を訪問

～阪神・淡路大震災の経験をふまえて～

平成23年1月13日（木）、国際赤十字・赤新月社連盟東アジア地域代表部首席代表マーティン・ファーラー氏（在北京）と国際赤十字・赤新月社連盟アジア太平洋地域事務所災害対応ユニット復興担当ナイジェル・イード氏（在クアラルンプール）が、阪神・淡路大震災からの復興における日本赤十字社の活動や災害リスク軽減への取組みについて見識を深めるため兵庫県支部を訪問されました。

両名は、東田事務局長と竹中事業部長から震災当時の日本赤十字社総力を挙げての救護班の活動や災害ボランティアの調整、救援物資の配布などの経験、そして被災を受けた支部として、震災の教訓から学び、現在実践している災害対策や防災訓練などの取組みについて説明を受けたほか、HAT神戸の地に兵庫県の赤十字活動の拠点として震災後に移転新築された社屋の災害対策室や災害救援物資倉庫、そして建物の免震構造などを視察しました。

また、阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターを訪れ、地震による破壊力を音と映像で体感できる1.17シアターや震災後の復興の過程を解説した展示なども見学されました。

ナイジェル・イード氏からは、「震災当時やその後の支部の活動についての説明や、支部の災害に備えた設備の視察などを通じて多くのことを学びました。兵庫県支部の災害への備えと対応設備には深い感銘を受けました。」との感想をいただきました。



(左) マーティン・ファーラー氏 (右) ナイジェル・イード氏



地域医療を守るため

～柏原赤十字病院の取組～

当院は人口7万人弱の丹波市にあり、瀬戸内海と日本海のほぼ中間部に位置する山間部にあります。加古川と由良川の最上流に位置し、本州で一番低い分水嶺があり、子午線（東経135度線）が通る町でもあります。産業では丹波大納言小豆の発祥地とされ、市内一面に田畑が広がり、霧が深く、冬には積雪は少なくなったもののスタッドレスタイヤで走行する車が多くなります。また、高齢化率は、28.0%（平成22年2月1日）と県下でも上位の地域です。

地域医療を守るため「地域医療に取り組んでくれる方」をキャッチフレーズに、看護学校はもとより身近なところへ看護師募集を行っていますがなかなか確保に苦戦しています。立地条件でなく、何か別の理由とその改善策が必要なのかも知れないとも思料しています。そんな中、本社より赤十字看護師人事交流として、姫路赤十字病院の看護師長2名を含む4名の紹介があり感謝、感謝の気持ちです。姫路赤十字病院の多岐にわたる支援や函館赤十字病院と名古屋第二赤十字病院から着任していただいた看護師の皆さんの志を掴むこと無く、今後も人事交流が意義あるものとなるよう実践の中で生かしていきたいと考えています。

秋元 香織（あきもと かおり）さん

函館赤十字病院から転勤により柏原赤十字病院に従事することになりました。レトロな建物に迎えられ、現在はスタッフの一員となり業務・看護スタッフの意識改善に繋がるように一丸となって頑張っています。患者さんが過ごしやすく、スタッフも働きやすい・楽しい職場環境になるよう働きかけていきたいです。



野畑 砂千子（のばた さちこ）さん

名古屋第二赤十字病院にて病棟勤務を経験していくうちに、以前より興味があった訪問看護に携わりたい気持ちが強くなり、紹介していただいたのが柏原赤十字病院との出会いです。利用者さんには安心感をもっていただけるよう心がけ看護を行っています。改めて学び直すことも多く充実した日々を送っています。



久保副支部長に国際活動報告

～フィリピンでの保健医療支援活動を終えて～

1月24日、昨年6月から約半年間にわたり、フィリピン共和国キリノ州に派遣されていた神戸赤十字病院の森看護師が、久保副支部長（兵庫県健康福祉部長）にフィリピンでの保健医療支援活動について活動報告を行いました。

この支援活動は、2005年から継続的に実施しており、支援活動場所が大変な山深いところに位置しているため、現地の住民が最低限必要な医療サービスを受けられるようにすることを目的に村落ヘルスワーカー等の人材育成や村落保健所の整備を図っています。活動報告の中で、久保副支部長は、森看護師からの活動報告に熱心に耳を傾け、時折、現地の風習や人々の生活の様子等を質問されていました。

また、保健医療支援活動中に甚大な被害をもたらした台風災害の緊急救援活動に携わったことも報告したところ、久保副支部長からは「そのような山深いところでは、（医療）活動をはじめ様々な活動に大変な苦労があったことと思います。この貴重な経験をいかして、これからはがんばってください。」とお言葉をいただきました。



久保副支部長（右側）に活動報告する森看護師（左側）